

Essays in Iwamoto Sociology

Hashizume Daisaku and Hidaka Toshiyasu (ed)

Sugimoto Shogo / Iwashita Hosei / Ichinomiya Masako / Yagosan

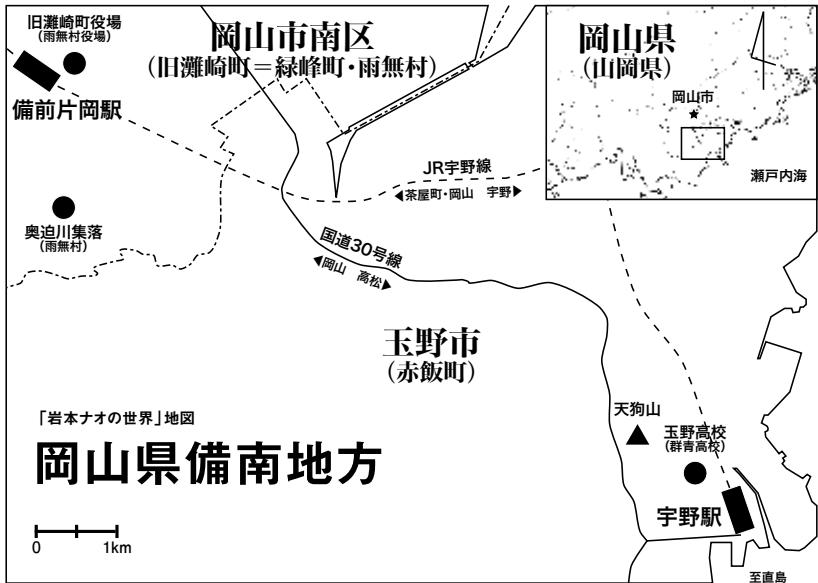
岩本社会学論集 橋爪太作・日高利泰(編)

杉本章吾 / 岩下朋世 / 一宮真佐子 / やごさん

Edited by
Hashizume Daisaku
and
Hidaka Toshiyasu

Essays in Iwamoto Sociology

2012, Iwamoto Sociology Project
Tokyo, JAPAN



序文 岩本社会学のダブルミーニング

日高利泰

5

岩本ナオ作品紹介

橋爪太作

18

●column1 ● テリカシーのなさには定評があります……(高柳紫雲)

第I部 岩本の社会

23

『町でうわさの天狗の子』にみるキャラクター表象の両義性

杉本章吾

25

●column2 ● 天狗、その始原と現在(高丘讓)

〈まなざし〉の行方——『雨無村役場産業課観光係』試論

岩下朋世

43

●column3 ● Awareness always comes afterwards. はじまりはじつまで、少しだけ手遅れ(高柳紫雲)

第II部 社会の岩本

63

岩本ナオの描く〈リアル〉な農村……………一宮真佐子 65

●column4● 雨無村在住青少年にとっての健全な娯楽とは？（高柳紫良）

岩本ナオとその瞳に広がる世界の入り口のこと……………やぶさん 87

●column5● メディアとしての少女マンガ、その都市的諸性格について（高柳紫良）

補遺

103

灘崎紀行——岩本ナオの世界へ……………橋爪太作 105

路上の蛮行はいかにして正当化しうるのか——「灘崎紀行」解題……………日高利泰 129

●column6● 読者のためのFunctional Analysis（増田 謙）

あとがき 岩本社会学でやったこと／やりたかったこと……………橋爪太作 139

序文 岩本社会学のダブルミーニング …………… 日高利泰

編著者が云うのも妙な話だが、この本のタイトルルちょっとおかしい。〇〇社会学といったら、ふつう産業社会学のように社会学する（社会学的方法を用いて分析する）対象が入るか、比較社会学のように分析に際して的方法論的特徴を示す言葉が入るかのいずれかだろう。歴史社会学のように対象でもあり方法でもあるというパターンもあるが、これはこれでそれほど違和感を持たれないだろう。岩本社会学の岩本は、まず間違いなく固有名詞である。すると、おそらくこれが対象となるはずだ。しかし、先ほど見たような産業や歴史のような対象と同じ意味で対象と呼ぶものなのか。まさにこの点に、ちょっとおかしい、いや、だいぶおかしい、という感覚の由来がある。社会学の本なのかどうかは、私にとって実はそれほど問題ではない。さしあたり強調しておきたいのは、この本が岩本ナオ（という作家およびその作品）についての本であるということだけである。よって、第一にこの本はファンジ的な性格を強く有しており、まぎれもなく同好の士に向けて書かれた（どちらかと云えば）私的なコミュニケーション・メディアである。しかし、同時にわれわれは、そうした語り自体の意味にも興味を持っている。マンガについて語ることは何をもたらずのかという問いは、われわれ自身が行っている行為に対する反省的考察であり、われわれがその語りの中にいるからこそ可能になるものでもある。この意味では、確かに社会学たりうるかもしれない。

はじめに「岩本社会学」というキーワードが登場したとき、われわれは次のように考えていた。岩本ナオ作品に描かれるフィクションな社会を固有の観察対象とする社会学Ⅱ岩本社会学、つまり岩本社会の学というわけだ。ここで問題になっているのは、固有の観察対象、という部分で、作品世界とわれわれの実社会を安易に接続するようないわゆる社会反映論を仮想敵として想定していたことになる。作品世界の中で描き出される社会を丁寧に削り出してなんとか記述したいという思いがあった。そしてもうひとつ、岩本ナオという作家およびその作品をめぐる社会学Ⅱ岩本社会学、つまり岩本の社会学としても企図していた。作品は商品としてわれわれの社会に流通し、作家自身もわれわれと同じ社会に生きている。よって、作品も作家も（現実の）社会の内部で観察される現象であり、当然社会的考察の対象となりうる。

現時点に至っても、岩本社会の学と岩本の社会学というダブルミーニングにかなして基本的な考え方は変わっていない。しかし、前作『岩本社会学への招待』（事実上本書のパイロット版にあたる。以下『無印』）においてふたつの目論見は、おそらくその両方ともがうまく機能しなかった。

たとえば『無印』のサブタイトルになっている「マンガ表現空間における〈地方〉の現代的位相をめぐる」というフレーズについて少し考えてみよう。地方という言葉について奇妙な山カッコも気になるのだが、それ以上に気持ち悪いのが「現代的位相」というところだ。「現代的」という判断を下しているのは一体誰なのか？（云うまでもなくそれは論者であって、「マンガ表現空間」の外側からの言及である。「マンガ表現空間」という言葉が一体どんな空間を指示しているのかも実は判然としないのだが、これをマンガによって描かれている空間と理解するならば、その空間の内側にいるのは作中の登場人物以外にありえない。強引に範囲を拡張するとしてもせいぜい作者

（描き手）が含まれるかどうかという程度だろう。となると、いわゆる社会反映論とどこが違うのか？ 先ほど岩本社会の学について、フィクショナルな社会を固有の観察対象とする、と云ったが、そもそもわれわれが観察者として作品内の社会を観察するならば、必然的に社会の外部からの観察にならざるをえない。われわれはマンガの中の人間ではないからである。では、岩本社会の学は不可能なのだろうか。

ここで一旦停止。社会、社会、と連続でてきて読者のみなさんは混乱しているのではないだろうか。ここまで出てきた社会という言葉には、大きく分けてふたつの社会があった。ひとつはわれわれが今現在生きている現実の社会、もうひとつは作品の中で描かれる人々が生活する社会である。さしあたり前者の現実社会を「社会」、後者の作品内社会を〈社会〉と呼ぶことにする。この使い分けを踏まえた上で前段までの内容を要約すると、以下のようになる。われわれは「社会」の内部観察者であり、外部観察者にはなれない。一方、〈社会〉の内部観察は不可能だが、〈社会〉の外部観察者にはなれる。

われわれがふたつの社会について語るとき、それぞれの観察のモードが原理的に異なるということがわかる。このことを受けて次に問題になるのが「社会」と〈社会〉の関係である。たしかに〈社会〉は「社会」の中にあつて、その構成要素のひとつであるわけだが、では縮小コピーにすぎないのかといえば、絶対にそんなことはない。その意味では〈社会〉は「社会」の中にあるという云い方すらもやや不適當である。

いわゆる社会反映論が批判される理由のひとつがここにある。「社会」と〈社会〉の同一視ないし「社会」から〈社会〉への一方的な影響関係ということを前提にしてしまうのは正しくない。しかし、〈社会〉が「社会」から全く独立に成立しているということもありえない。少なくとも〈社会〉を創造（想像）する描き手は「社会」の構成員だし、そこに〈社会〉を見出す読者も「社会」の一員だし、少なくともわれわれが〈社会〉を理解する上で「社

「会」が参照項になっていることは間違いない。よって、そもそも反映論自体が悪だというわけではなく、観察者（語り手、論者）自身の立ち位置への無反省性や観察対象の属性に対する考察の甘さといった欠点を持ったものが反映論と呼ばれるものの中に多く含まれており、そこから反映論に対するネガティブなイメージが構築されていたということになる。

「社会」と〈社会〉の関係は一義的に定義できない。「社会」と〈社会〉がよく似ていて一見まったく同じもののように見えることもあるだろうし、逆に正反対で何もかも違っている場合もあるだろう。よく似ている場合には「社会」と〈社会〉の同一視が起こりやすいし、反対に著しくかけ離れている場合も〈社会〉を「社会」の裏返しのと捉えてしまうことがある。われわれが注意しなければならないのは、〈社会〉を見ながら「社会」について語ることや逆に「社会」を見ながら〈社会〉について語ることである。これらはすべて語りではなく、騙りである。つまり、「社会」と〈社会〉は異なる観察対象であり、それぞれの観察結果を他方の観察結果として語ることはできないということだ。

「岩本ナオ」について語ること、語り手の位置

岩本ナオという作家は良くも悪くも語り手にとつてのフックが多い作家だと思う。先ほどまでの用語系を引き継いで云うならば、〈社会〉を語ることで「社会」について語った気になってしまう危険が大きいということだ。この現象は特に岩本ナオに限った話でもなく、いわゆる「語られるマンガ」というのは大抵こうしたフックの多い作

column 2 天狗、その始原と現在(高丘讓)

世の中が乱れると、天狗が騒ぎ出す。この国で最も天狗が強大だった鎌倉時代末期から南北朝時代は、御家人制や国家仏教といった旧来のシステムが崩壊し、それまで知的エリートに独占されていた仏教を民衆へ広めた鎌倉新仏教や修験道、荘園制を超えた資本の流れをつくる武装商人の悪党などそれまで抑えつけられていたアノマリーな力が一気に噴出した時代だった。この時期、こうした人々を非難する立場から描かれた絵巻物には、「天狗の長老」「天狗の所業」といった言葉が散見される。

そもそも宗教にしろ資本にしろ、どちらも人のなす事でありながらどこかで人の理解を超えた世界へと繋がっているのだが、こういう昏みをうっかり覗き込んでしまうと、それに「mana」だの「ゼロ記号」だのと名前を付けて無理くり理解しようとするのも人の性だ。「天狗」も中世人にとって理解できないものの原因として割り当てられた「何か」だと考えると分かりやすい。

だから、「理解できない」と観念された現象が時代とともに変われば、その虚焦点である天狗像も当然変わる。鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇は、楠木正成ら悪党(≒新興財閥)の財力・軍事力やインド渡りの怪しい性的呪術&乱交パーティー(まるでサドとヒッターを足して2を掛けたような人ですね^_^;)など、古い体制が扱いかねていたアノマリーな力を活用して自らの絶対王権を創り上げようとしたが、それはちょうど、外的な仏法の攪乱者から権力者の内紛を巻き起こす政治的トリックスターへと、天狗説話に描かれる天狗像が変貌していった時期と重なっている。

だが、一時は吉野に籠る南朝軍と結び、峰伝いのP2Pネットワークで反北朝闘争をサポートした修験勢力も、中世末期から近世初頭にかけて徐々に江戸幕府の保護や大寺社の末寺化が進行してくる。それに対応して修験道と関係の深い天狗界でも体制化が進み、江戸初期頃までには鼻高天狗(康徳様)→烏天狗(瞬君)というヒエラルキーが確立する。

神として祀られるようになった天狗は、システムの内と外を往還する荒々しい異形性を抑え、共同体の平和と安寧の守護者の側へと移行する。元破戒僧の康徳様が緑峰山一帯の火伏せの神となり、元流浪の民で超人的な技を持つ神谷一族がその保護のもとで山麓に定住したという『町天』の設定は、自由と流動の時代の終焉という日本列島の歴史における中世から近世への転換点をその裏に畳み込んでおり、極めて興味深い。

このような複雑な経緯を辿ったがゆえに、現代から見ると天狗は神から妖怪まで(あるいは恐ろしさから間抜けさまで)幅広いイメージを投影する存在となっている。シリアスとコメディを自在に行き来する『町天』の物語世界も、こうした天狗の歴史的性格の上に展開されていることは間違いないだろう。



岩本ナオとその瞳に広がる世界への入口のこと

やごさん

1

岩本ナオの存在について語るには何が必要か。岩本ナオ作品は様々な形でレビューされているが、その魅力を言葉にすることの難しさについて言及する例は少なくない。もちろん、少女マンガとしての魅力があるのは確かなのだが、少女マンガとしてのジャンル論と岩本ナオ作品の個性をどうやって結び付ければ説明できるのか。『スケルトンインザクローゼット』（以下『スケルトン』）の単行本を読んでから今日まで、筆者も様々な考えを巡らせてきた。そこで本稿では、大きく分けてふたつの点から整理してみたい。ひとつは、岩本ナオ自身ではなく、まず彼女がどこに存在しているか、外部から少女マンガとしての立ち位置を踏まえること。もうひとつは、岩本ナオ作品における表面的な要素、つまり描画コード（いわゆる「絵柄」）からその具体的な表現について考えることだ。

まず第一に、岩本ナオがデビューから現在まで活躍する雑誌である、小学館の『Howers』の位置付けについて確認しておく。『Howers』は、かつての『プチフラワー』を前身に、『別冊少女コミック』の連載作品を一部引き継ぐ形で二〇〇二年に創刊された雑誌だ。キャッチコピーにある「珠玉の少女まんが進化型」の通り、萩尾望都や竹宮恵子ら、いわゆる二四年組の作家を始め、小学館の少女マンガ誌で長年活躍を続けてきたベテラン作家を中心とした連載陣を誇っている。その一方で近年では、水城せとな・ねむようこ・草間さかえ等、他社で活躍中の実力作家を積極的に起用し、目の肥えたマンガ読者からも評価の高い作品を数多く輩出している。その誌面への評価は、少女マンガの発展の歴史を踏まえた雑誌でありながらも、女性マンガ家のキャリアパスの多様化と細分化するジャンルを横断してマンガに親しむ女性読者のボーダーレス化を前提とした「女子マンガ」概念とも高い親和性を持つものと言える。

女性向けマンガ誌において、女性マンガ家・女性読者のボーダーレス化が進行中であることは、現在おそらく多くの人間が認めるところだろう。しかし、『Howers』の創刊前後から現在までの小学館の女性向けマンガ誌の動向を振り返ってみると、『Howers』以外の雑誌は新人賞生え抜きの新人作家を中心に、ほぼ専属制に近い体制を維持してきたことが分かる(その証拠に、タアモは『ベツコミ』の専属を外れる際に、その事実をブログに明かしていた)。そもそも女性マンガ家のキャリアパスが多様化を余儀なくされた原因のひとつには、少子化に伴う低年齢層向けの

1 川原和子・福田里香・野中モモ・藤本由香里「『ゼロ年代のマンガ状況——次の10年に向けて 第1部〈女子〉が読んだゼロ年代」(『マンガ研究』vol.17、日本マンガ学会、二〇一一年)を参照。

灘崎紀行——岩本ナオの世界へ

橋爪 太作

二〇一〇年三月三一日夕方六時、僕は足早に水道橋の駅へと向かっていた。裏通りを抜け、中央線のガードのほうへ伸びる表通りへ。いましがた後にしてきた小さなビルディングがどんどん遠くなる。

もうたぶんこのようにしてこの道を歩くことはないだろうとか、そういうことはなるべく考えないようにした。何か気持ちの固着点を見つけてしまうと、それを軸に変なぐるぐる回りがはじまりそうだったから。

いま自分は自由で、どこにでもいける、それだけは確かな感触として持ち続けたかった。いまずぐこの感触を確かめなければ、何か大切な物をなくしてしまうとも感じていた。何でもいい、とにかくいま何かしなければ、未来が消えてしまう……何かに突き動かされたような、馬鹿げた考えが浮かんできてならなかった。

そして僕は水道橋駅で行き先のなき切符を買った。

はるばる箱根の山越えて、桜の花咲く西国へ……。



図 16 リアルドピンク横丁



図 17 天狗山山頂



図 18 天狗山を背にした玉野高校

と玉高周辺はだいぶ落ち着いている。鹿児島島の地理に詳しい人なら、玉龍高校辺りの雰囲気と言えば分かるだろう。さほど高くない山の懐に半ば入り込んだ形で学校とそれを取り巻く家々があり、全体として行き止まりという感じが強くする。立地だけでなく高校の雰囲気やランクにも似通ったところがあるかもしれない。

あまりカメラを持って学校の回りをうろろするのもアレなので、すぐそこに見える天狗山の岩だらけの山頂へとさっさと向かう。いかにも天狗が好みそうな荒涼として奇つ怪な風情だ(図17)。この辺りの地質は風化しにくく火成岩らしく、頂上付近で岩盤が露呈している。住宅地のすぐ裏に天狗山はそびえているのだが、短い調査時間の中では登山道らしき物を見つけることはできなかった。天狗山登頂も次回以降の課題である。

それでもずいぶん高いところまで登ったのは確かなようだ。坂道の上から振り返ると、玉高、港、海、そして直

あとがき 岩本社会学でやったこと／やりたかったこと…………… 橋爪太作

「岩本社会学」なんて冗談みたいな企画が最初に生まれたのは、たしか二〇〇八年のある秋の日、新宿西口にあるロッセリアの三階であったと思う。ちょうど『Girls Comic Art Our Best』岩本ナオ特集号の巻頭座談会のために上京してきた日高と、すっかり冷めたコーヒーを飲みながら延々とヨタ話をしてきた。

話題はいつしかマンガのことになった。少し前に二巻目の単行本が出たばかりの『町でうわさの天狗の子』が二人とも気になっていた。お互い鹿児島の団地と郡部に育ち、岩本ナオのマンガにおけるリアルな地方描写にはまるで自分の地元がマンガになったような親しみを感じていたが、そこに「天狗」という非日常の存在が地域社会の日常の風景として入り込んでいることが、私たちを混乱させていた。

いや、問題はそれだけではない。ファンタジー要素などいかにもない『Yesterday, Yes, today』や『雨無村役場産業課兼觀光係』に描かれた、東京と村を新幹線で日帰り往復し、携帯とインターネットが当たり前のようにあり、高校中退のデキ婚ヤンキーやガレージで呑んだくれるおっさん、そしてイノシシやヌートリアが出没する雨無村の空間も、あくまでリアルな田舎を描きつつ、どこかで「リアル」を超えた幻想性を感じさせた。それは、都市を舞台とした初期の短編で繰り返し描かれてきた、「だって現実には誰も助けてくれないでしょ」(『野花』)というシリアスな現実認識と、それを受け入れた上でなお何かを信じてつながろうとする人々という主題とも重なっていた。

岩本社会学論集

2012年5月5日 第1版第1刷発行

編者 橋爪太作・日高利泰

発行所 岩本社会学プロジェクト

印刷所 POPLS

連絡先 iwamoto.sociology@gmail.com

装丁・本文DTP：河原通信社図案室